

「殺し屋」はなぜ「おはようございます」を言わないのか。

近年、映画やドラマを早送りで見ると「倍速視聴」が広まっているのは、ご承知のとおり。時間あたりの生産性を重視するタイムパフォーマンス（以下、タイパ）はビジネス界だけでなく、若者たちの意識や生活においても当たり前になったわけである。音楽業界でも、「イントロが5秒以内」「早く見せ場を作ること」がヒット曲の条件だそうである。イントロで曲紹介をしていたDJが困り、イントロ当てクイズがなくなるだけといえばそうなんですが、一抹の寂しさも感じます。ただし、今回の主題は「タイパ批判」ではありません。タイパ社会でどういう風に人間関係を構築すべきかを考えてみたいと思います。

さて、何か大げさに問題提議をしてみました。結論はいたって簡単。今までとおり、「あいさつをしっかりとしましょう」です。長い曲だと最後まで聴いてもらえないんです。人の心をつかむため、はじめのあいさつに全力を注ぐ以外に、いい手がありますか。あるなら教えてください、と逆ギレぎみに聞きたいくらいです。

三学期の始業式でもあいさつの大切さに触れましたが、その時紹介したのがお笑いタレント松村邦洋さんの「あいさつができるって、けっこう芸能界に入った時、助かるんですよ。（中略）『あいさつにスランプなし』という、自分で作った言葉があるんです」という言葉。35年も芸能界で活躍してるんですから、説得力がありますね。ここでもう一つ付け加えるなら、昔読んだ本か映画のセリフ（出典を思い出せません。すみません）「人を殺そうと決意したら、決して話しかけないことだ。互いにやりにくくなるだけだから」「殺し屋」は良い人間関係を築く必要はないですから、「おはようございます」とは言わないわけです。

ヒット曲の話しをもう一つ。1960年代中期から後期は、アメリカが激しく揺れ動いた時代だったと言われます。1965年8月に、黒人の投票権を保証する公民権が成立したことが、白人優位主義者の黒人への暴力行為や公民権活動家へのテロを誘発し、その反動としての黒人たちの「暴力には暴力を」という動きまで生んだ。そして、反戦を表明していたキング牧師が凶弾に倒れるという大事件。こうした激動の真っ只中で、黒人音楽専門レーベルの創立者ベリー・ゴードィJRは、自社レーベル（「モータウン」）を全米有数のレコード会社に成長させるという奇跡を起こした。もちろん、工場のようなヒット製造システム（専属作家、専属バンド、専属歌手を組み合わせるやり方は、地元デトロイトの自動車製造の流れ作業にヒントを得たと言われている）が最大の武器であったが、白人リスナーに受け入れられるためには、人材を育てなければならないと考え、スカウトした黒人スターの卵たちをチャームスクールに通わせ、あいさつの仕方はもちろん、紳士淑女のマナーまで身につけさせたのは有名な話。白人と黒人が対立した激動の時代に、黒人歌手たちが白人リスナーに大いに受け入れられた理由は、彼らが身につけた礼儀作法にあったといっても過言でないだろう。

アメリカの大百貨店経営者ジョン・ワナメーカーの言葉「微笑も握手も時間や金はかからない。しかも商売は繁盛する」。微笑と握手を「あいさつ」に置き変えたら、「しかも誰もが気持ちよくなる」という感じになるだろうか。私たちはもちろん殺し屋ではありませんから、あいさつで損をする人は誰もいないと思いませんか。

令和5年2月1日

大村城南高等学校長 中小路尚也